

サンプル

Lesson5 朔様の「沼」へようこそ。傲慢な指先。

――勉強後の……

「今日はそろそろ……」

立ち上がろうとした俺の袖を、ハルが縫るように小さく引く。

「……ねえ、泊まって。母さん、出張でいないんだ」

潤んだ瞳を泳がせ、ハルは消え入るような声で続けた。

「……だって、まだ一緒にいたい……っ」

その言葉を聞いた瞬間、俺の中の何かが完全に切れた。

ハルの顎を指先でクイと持ち上げ、逃げられないように見つめる。

「そんなこと言われたら、帰れるわけないやろ。……俺にどうされてもええんやな？」

深く、熱い口づけを落とすと、ハルは瞬きを忘れたように俺だけを見つめている。

「……お前、ほんま罪なやつやな。そんな顔されたら、もう止まらへんわ」

寝室のベッドに沈み込むと、静寂の中に重なり合う吐息だけが響く。

深く唇を重ね、そのまま首筋から鎖骨へ、吸い付くように愛撫を降らせていく。

「は……っ、ん……っ」

ハルのシャツをはだけさせ、尖った胸の先端に唇を寄せた。

湿った舌先でチロっと焦らすように舐め上げると、ハルの背中が大きく反る。

「あっ……もっと、もっと吸って……っ！」

「ハル……お前、ほんまエロいな。俺の前でだけ、そんな声出すんや」

チュッ……チュパッ……と湿った音が部屋に響く。

尖った乳首に舌先を這わせ、チロチロと焦らすように舐め回してから、俺の手はハルの下着の中へと滑

り込み、熱を帯びたそこを指先で容赦なく弄り回す。

「はぁ……はぁ……気持ちいい……っ」

「もっとしたいんやろ？ ほら、俺のこと喜ばせてみ」

俺はベッドに仰向けになり、昂った自身の熱をハルの口元へ寄せた。

「ハル……お前、俺の前でだけこんなエロい声出すよな。……他の奴には絶対見せたらあかん」

独占欲を剥き出しにした声で囁きながら、手を下着の中に滑り込ませる。

すでに熱く濡れたそこを、指の腹でぐちゅぐちゅと捏ね回す。

「んっ……はぁっ、朔さん……っ」

「もっと欲しいんやろ？ なら、俺を喜ばせてみい」

俺は仰向けになり、ズボンを下ろして昂ぶった熱を露わにする。

脈打つ先端をハルの唇に擦りつけると、ハルは恥ずかしそうに目を伏せながらも、

ゆっくりと口を開けた。

「……んっ……ふぁ……」

先端を咥え込んだ瞬間、熱い舌がねっとりと絡みつく。

ジュルッ……チュポッ……ジュルルッ……チュ…

いやらしい音を立てて吸い上げ、喉の奥まで飲み込むように頭を沈めてくる。

「っ……ん……上手いやん、ハル。……もっと奥まで咥えろ」

優しく髪を掴んで軽く押さえつけ、喉奥まで押し込む。

グチュ……ヌチャ……と粘膜が擦れる淫らな音が連続する。

涙目になりながらも、ハルは必死に舌を這わせ、喉を締め付けてくる。

「はぁ……っ、ええぞ……そのまま、俺の形覚えとけよ」

独占欲を滲ませた低い声で命令しながら、腰を浅く動かして喉を犯す。

ハルの唾液が滴り落ち、俺の付け根まで濡らしていく。十分に濡れたところで、ハルの口から自身を引き抜く。

糸を引く唾液が淫らに光り、ハルは荒い息を吐きながら俺を見上げた。

「四つん這いになれ」

命令口調で言うと、ハルは震える手で体を起こし、尻を突き出すように四つん這いになる。

潤んだ瞳で振り返るその姿に、俺の独占欲がさらに燃え上がった。

指を一本、ぬるりと秘部に沈める。

「あんんっ……あ、ああっ……！」

中はすでに熱く蕩けていて、指一本でびくびくと締め付けてくる。

「気持ちええか？ お前のここ、俺の指だけでこんなに濡れて……俺専用やな」

二本に増やし、ぐちゅぐちゅとかき回す。

ハルの腰が勝手に揺れ、涙声で懇願してくる。

「もう……だめっ……朔さんの挿れて……っ」

「まだや。……ちゃんと言え。俺の何が欲しいんか」

ハルは羞恥と快楽でぐちゃぐちゃになりながら、掠れた声で叫んだ。

「朔さんの……っ、朔さんの、おち○ぽ……欲しいっ……！」

その瞬間、俺は満足げに口角を吊り上げ、

「ええ子や……一生忘れられんくらい、俺の形刻み込んだる」

昂った自身を一気に、最奥まで突き刺した。

ズブッ……ズチュウウツ……！